

凡例

- ・この図録には黒川古文化研究所が所蔵する刀剣のうち、資料性があり、鑑賞に供することができるかと判断した四〇点を収録した。
- ・図版には作品番号、名称、時代を記載した。
- ・なお、解説等にある「刀〇〇」「染〇〇」などの番号は研究所における収蔵番号を示す。
- ・◎は国宝、◎は重要文化財を示す。
- ・執筆、編集、デザインはすべて川見典久（黒川古文化研究所）が担当した。
- ・刀剣の撮影および画像加工はすべて深井純氏による。ただし、拵え・刀袋等は川見が撮影した。

目次

黒川古文化研究所の刀剣コレクション	4
―その全貌と来歴―	
図版	17
刀剣に関する用語	101
作品解説	105



1 太刀 銘 國友

刀 11

時代 鎌倉時代(12〜13世紀)
法量 刃長 72・4 cm (二尺三寸九分) 茎長 18・8 cm

腰で強く反り、細身で薄く、鋒も小さい優雅な姿の太刀である。なかほどより先は特に細く、研磨を重ねたことによる研ぎ減りもあるものの、鎌倉前期を降らない古い形式とみえる。小板目に奎目交じりの地肌はうっすらと「映り」が立ち、地沸がつく。ゆるやかに乱れた刃のなかにも沸がよくつき、ところどころ直線的な「金筋」となる。茎には凹凸のはげしい錆が全面に付き、長い年月を経たことを物語る。『清賞』には勝手下りの鑓目が入ると記すものの、現状では錆のため不明瞭である。縦に二つ目釘孔があげられ、細く作った茎尻は浅い刃上り栗尻とする。

国友は東海道から京都への入り口にあたる東山・粟田口を本拠とした粟田口派の刀工国家の長男で、藤左衛門尉と称し、藤林と号したという。後鳥羽院が各国から月番で招いて作刀させたという十二名の「御番鍛冶」の一人に挙げられ、その御剣「乙丸」を打ったとも伝えられる(観智院本銘尽、能阿弥本銘尽など)。在銘作はきわめて少なく、熱田神宮所蔵の太刀(重要文化財)などが知られるのみである。

2 ◎太刀 銘 國光

刀 12

時代 鎌倉時代(13世紀)
法量 刃長 80・3 cm (二尺六寸五分) 茎長 23・0 cm

腰反りがやや深く、鋒を小さく作るものの、前刀よりは厚くしつかりとしたつくりとする。茎のなかほどで錆の様態が異なっており、後世に短く切り詰める「磨上げ」がおこなわれたとみられ、当初は10〜20 cmほど長かったと考えられる。つんだ小板目の地肌には「映り」が立ち、細い直刃調の刃文は浅くのたれ、匂口がしまつて小沸がついて冴える。錆の新しい箇所にあけた最も上の目釘孔が現状のもので、他に二つ下方に並んであけられている。茎尻は浅い栗尻で、『清賞』には筋違の鑓目が入ると記すものの、現状は錆で不明瞭である。

銘にある「国光」は地景や金筋のない作風や銘の特徴から、国友の孫とされる粟田口国光とみられる。ただし遺作は稀で、太刀では岐阜・養老寺の所蔵品が知られる。

伝来は不明ながら、葵紋の小道具が付いた「黒蠟色塗打刀拵」(刀212)が付属しており、いずれかの時期に徳川家周辺の所有であった可能性がある。



3 短刀 銘 吉光

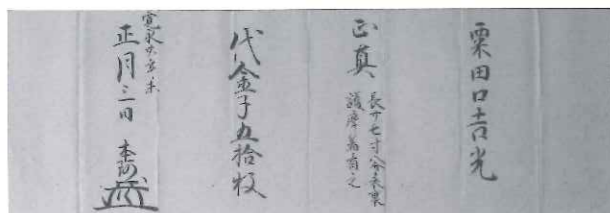
刀 19

時代 鎌倉時代(13世紀)
法量 刃長 23・6 cm (七寸八分) 茎長 8・9 cm

平造、三つ棟で、やや細身の上品な姿をした短刀である。つんだ小板目の地肌には部分的に大きな模様があらわれ、地沸がこまかにつく。直刃調の刃文はフクラの手前でやや細くなり、鋒では尖り気味に返る。匂口がしまり、小沸がついて冴える。表裏には不動明王を意味するといわれる護摩箸の彫物がある。茎は浅い栗尻とし、勝手下りの鑓目を入れる。現状では二つの目釘孔があげられるが、上側には近接してもう一つ埋めた痕が残る。

吉光は京の粟田口派の刀工で、通称は藤四郎とされる。江戸時代には正宗、郷義弘とともに三作に挙げられるなど短刀の名手として知られ、「厚藤四郎」(東京国立博物館、国宝)、「後藤藤四郎」(徳川美術館、国宝)など多くの名物が伝わっている。

本刀には寛永二十年(一六四三)正月三日付「代金子五拾枚」の折紙が付属し、白鞘に貼られた菱葉紋より、大和郡山藩主柳沢家の伝来とみられる。元禄十四年(一七〇一)十一月十五日に柳沢吉保(一六五九〜一七一四)が五代將軍綱吉から賜ったものの可能性があるが裏付けは取れない。



4 短刀 銘 吉光

刀 20

時代 鎌倉時代(13世紀)
法量 刃長 23・6 cm (七寸八分) 茎長 11・1 cm

3と同じく吉光作の短刀で、茎をやや長く作る。地肌は小板目がつみ、地沸がこまかについて冴える。刃文は直刃で、鋒でわずかに掃きかけて、小丸に返る。刃中には小沸がつき、「砂流」や「金筋」がわずかにかかり、匂口は比較的是つきりとして冴える。表に護摩箸、裏には腰樋に添樋を彫る。生ぶの茎は栗尻とし、勝手下りの鑓目を入れる。目釘孔二つがあげられるが、両者とも一方が角張る特徴的な形状となる。

延宝四年(一六七六)三月三日付「代金子三拾枚」の折紙とともに、「紫地龍唐草文様緞子刀袋」(参考2、染481)、「紺地蝶桐唐草文様金襴刀袋」(参考3、染429)が付属する。添えられた大正頃の書付と、京極家の享保十九年(一七三四)「御刀脇指御印帳」より丸亀藩主京極家伝来とみられ、慶長五年(一六〇〇)六月十八日、大津城において京極高次(一五六三〜一六〇九)が徳川家康より贈られたものと推測される。『埋忠銘鑑』に掲載され、元和二年(一六一六)、高次の長男若狭守忠高(一五九三〜一六三七)の依頼により埋忠斎が金具(鍔)を製作したと記される。

